

とぎには、辛口

12

◆私の最終講義

文学部教授
元文学部長

松本道介
Matsumoto Michisuke



大学の教師には定年でやめる前に「最終講義をおこなうしきたりがある。『最終講義』は講義の最終回というのではなく、相撲でいえば断髪式のような一種の儀式である。かつての学生をはじめ職員も含めた同僚を前にしてのお別れ講演であり、誰にもわかる話で、なおかつ地方から聞きにきてくれた教え子にも何かを感じ得て帰ってもらえる中味がなければならぬ。

とはいえ、最終講義は必ずやらなければならないものでもなく、平生の講義の最終回を坦々とおこなって坦々とやめてもいいのである。私は話したいというまいわけでもないし、

以前から「坦々と最終回」の方へ気持ちは傾いていた。とりわけ七年前におこなわれた同じドイツ文学の小塩節先生の最終講義「愛の詩人ゲーテ」があまりに見事だったので、自分など「最終講義」は辞退した方がいいという気持ちになっていた。

したがって中大に勤める最後の年である去年も秋までは「最終講義」のことなど何も考えずに過ごしていたのだが、秋も深まるにつれ、二十年、三十年前の卒業生から時々問い合わせがくるようになった。久しぶりに同級生同士で集まれるチャンスだからぜひやってくれという催促の手紙もきて、次第に私もや

はりやらねばなるまいかという気持ちになってきた。

いざ、やるとなると、十一月初旬には準備が始まって講義のタイトルもきめなければならぬ。その時は何も考えないまま「ひとつの結論」という題名を口にしてしまった。題名を出してから何を話すかをあれこれ考え出したあげくに文学部の都合もあって私の予想より一ヶ月も早い十二月の十八日に最終講義をおこなう運びとなった。

「ひとつの結論」と言っても何に対する結論なのか、文学についての結論、人生に対する結論、学問に対する結論、いろいろな結論を話したような気がする。そのなかから文学に対する結論の部分について少し書いてみようと思う。

演題「ひとつの結論」

文学部の講義で私は三十二年間のほとんどを文学史、つまりドイツ文学史を担当していた。文学史の研究を専門にしてきたわけでもないのに、なんとなく文学史の授業を担当することが多かったのである。そのせいか私は文学を含めて文化一般を歴史の流れの中で見



るくせがついてしまった。そうした流れの中で最近というか二十世紀に入ってからドイツ文学に衰えというものを感ずるようになった。衰えというよりもっと端的に面白くない、難しくてわからないと感ずるようになった。

難しくてわからない小説の代表格はカフカの「変身」だろうか。カフカの小説は今でも世界的に有名で二十世紀世界文学ベストテンなどというと必ず入るのがカフカである。

しかし私は昔からカフカは苦手だった。「変身」はサラリーマンが或る朝起きるとゴキブリか甲虫みたいなものに変身している話であ

る。夢だろう、まさか、まさかと思つてみて、虫になったことは動かしようのない現実で、虫になったサラリーマンはまさに虫けらとしてあわれな死をとげるのである。私は常々、虫けらに変身した筈のサラリーマンが、人間としての意識だけは十分すぎるほど持ち続けているのがおかしいと思つてきた。悪夢といえばとてもない悪夢であり、その悪夢が覚めた目で冷静にリアルに描写されていくので、私は読むのがいやだった。

しかし「変身」は世界的にも有名な作品で、文学史の上では必読書であった。解説には現代人の孤独とか存在不安とかを描いた最高の小説だと説かれているものの、私は学生諸君にはあまりすすめなかつた。学生諸君に文学好きになつてもらつたために授業をしているのだから、無理に読ませて文学嫌いをふやすやうなことはしたくなかつたのである。

むろん読みたい学生は読めばいいのだが、或るとき私は、カフカの「変身」が好きだという人はその人自身不幸なのかもしれないと書いて多少の物議をかもしたこともある。あるいはカフカを読んでいやだと思つた人は口直しに永井荷風かふうを読めと言つたことがある。

荷風とカフカ

荷風とカフカは妙な取り合わせであり、こんな取り合わせを持ち出す教師は私一人だろう。しかし荷風とカフカは似ている点が多い。荷風はカフカより四つ年上だからほぼ同年と言つてよく、荷風は若いときにアメリカやフランスをかなり長く経験していて近代感覚も十分にそなえている。一番似ているのは実業家として成功した父を持つていて、

その父に嫌われた息子、文学青年であるがゆえに父に疎こぼまれた息子だったこと、それに生涯孤身で孤独だったことである。したがつて荷風の小説でもカフカの小説でも主人公はみな孤独なのだが、小説の印象はまったく違う。荷風の小説は「あめりか物語」でも「ふらんす物語」でもいつもまわりの樹木や草花に目をとめながらみずからの孤独を寂しい歌としてうたつている感じなので、たいへんな魅力を感じる。荷風の小説なら誰にもすすめたくなるし、文学が好きになる人は確実にふえるところにいる。しかしカフカの小説には樹木も草花も出てこない。見えるのは灰色の壁ばかりであり、そこに私はアウシュヴィッツ

の予感をしか感じない。カフカの妹は三人もナチスの強制収容所で亡くなっており、カフカとして四十歳くらいで病死せず、六十歳くらいまで生きていれば同じような運命が待っていたのだから決してこじつけではないつもりである。

思えば、ユダヤ人は旧約聖書の時代からみずからの安住の地を持ってない不幸な民族であつた。いわば数千年にわたる難民なのであり、その点からすると大昔から外敵の侵略を受けたことがほとんどなく、国土が常に安住の地であり続けた日本人はユダヤ人と正反対の、世界でも最も幸福な民族と言つてよく、ユダヤ人の運命にありきたりの同情を寄せることはユダヤ人に対してかえつて失礼になるような気がしていた。

文学の衰えー歌が聞こえなくなつた

二十世紀に入つてドイツ文学が衰退したというのには別に私のひとりよがりの感想ではなく、例えばドイツでも最近、ドイツ文学なるものは一七五〇年にはじまり、一九五〇年に幕をとじたという本が出て多くの人がこれにうなずいているし、日本でも文学は終つた、

小説は終つたという考え方はそこに出てくる。

つまり文学が衰えたというのはドイツだけのことでなく、日本でもアメリカでもフランスでも衰えていった。今から五十年前のことと考えると、世界的に知られた作家が何人もいた。ヘミングウェイとかカミュとかマン、ヘッセとかがいて。学生でも文系はいうに及ばず理系の学生でもそうした作家のものを読んでいる人はたくさんいた。

しかし今ではそのような“世界的”作家はまったくといつていいほどいなくなり、世界中で読まれているのは「ハリー・ポッター」だけという状況になつてしまつた。

どうしてこんなことになつたかを説明するのはたいへん難しいが、十九世紀から二十世紀にかけての文学の変遷をごく大雑把に考えてみると、私は十九世紀の作品には歌があつたけれども二十世紀の文学には歌が聞こえなくなつたことを感じる。

なぜ、歌の話など持ち出すのかと聞き返す人もいるかもしれないが、ひとつには歌がぐりかえしうたうものだからである。むろんきらいな歌ならくりかえしうたうことはないが、

好きな歌ならくりかえしうたうし、くりかえし聴く。小説のたぐいも昔はくりかえし読む人が多かつた。本が少なかつたせいもあるが、話の筋や結末がわかつていてもくりかえし読みたくなる小説があつた。それはおそらく語り口に魅力を感じるからであり、広義の歌をその小説に感じているからだと思う。中には二度目に読んだら最初よりも面白く、三度目に読んだらさらに面白かつたなどという小説に出会うことがあつた。それこそは読者として最高の仕合わせなのではなからうか。

しかし最近はまだ一度読みたいような小説に出会うことは少なくなつた。少々面白い小説でも一回読んだらそれきりというのがふつうになつてしまつた。それこそが小説の衰えであり、小説から歌が失われたことを意味するのだと言つてよいと思う。

歌を失つた小説は理屈とか謎とか推理とかで勝負するようになつてきた。一回読んだだけではなにやらわけのわからない小説もふえてきた。ウイーン作家にシュニツラーという人がいる。トーマス・マンより十歳くらい上で少し古いタイプに属するが、この作家は自作について“意味”を質問されると「読

者に“意味”を説明しなければならぬ作品など失敗作だとお考え下さい」と答えて解説の方は一切ことわっていたそうだ。私はこの答えかたがたいへん好きで、私の書く論文だつてエッセーだつて、読者によくわからないと言われたら、それは書く方が至らないからだと思つてゐる。

しかし理屈や謎の多い小説はふえるばかりで、作家自身が解説をする場合もあるが、カフカのように早々と死んでしまつた場合もあるから、評論家や学者の出番が多くなる。「カフカを読み解く」といつたたぐいのマニュアル本も多数出てくるし、これらのマニュアル本となると、格別の理屈も謎も含まない平明な小説にまで“もつと深読みをしる”、“もつと裏読みをしる”、そうでないと本当に読んだことにはならないとばかりに解説を押しつけてくる。

難解な小説 孤独な読者

二十世紀になつてなぜ難しい、意味もよくわからない小説がふえたのか。ひとつには作家が一人で書くようになったからだろう。

今では作家が一人で書くのは当たり前のことながら、昔は必ずしも当たり前のことではなかつた。過去の詩や小説はむしろ大勢の人のための文学であり、大勢の人がいっしょになつて作つた文学であつた。そのことを説いたのが、今から八年前に定年を間近に控えて急死された同じドイツ文学専攻の福田宏年先生の遺著「時が紡ぐ幻」(集英社)であつた。

その本を中心となるのは文学というものは長いあいだ口承文芸だつたという説である。てつとり早くいえば「平家物語」は琵琶法師の語りものだつた。昔は印刷術もなかつたし、字の読めない人も多かつた。本などは写本であり、持つてゐる人も滅多になかつた。したがつて文芸の多くは今日の音楽会に似たパフォーマンスとして、演者と聴衆が一体となつて唱^{とな}えかつ聞くものとして存在してゐた。それが印刷術の発達とともに文芸は読者一人一人が個室のなかで黙読するものになつていつた。また詩を書くことも小説を書くことも、作者が個室でおこなうものになつていつた。それでも初めは多くの読者を思い浮かべて彼らに語りかけるつもりで書いたものが、次第に自分の思いを一種のモノローグ(独白)と

して自分のために書く傾向が強くなつていつた。そうになると自分にはわかるが他人にはよくわからない文章がふえてくる。

つまり日記のようなものである。日記というのは自分のために書くものであり、自分が死ねば焼いてもらうのが普通だろう。カフカもまた日記のようなつもりで小説を書いてゐた人であり、一九二四年四十一歳で亡くなる時、残つた原稿はすべて焼いてくれと遺言したのだつた。この遺言はたいへん意味深い遺言だと思つたが、友人プロートは遺言に反して次々に出版していつた。そんな作品が現在カフカ全集として出ているものの八割くらいにあたるという。

読んでもわからない小説というと私などは二度と読む気がしないが、研究者には難しい小説というと俄然フアイトのわく人が多いらしく、世界中にはカフカの研究者が一人一人いてその一人一人が別の解釈をしているという噂も聞く。研究者一万人がそれぞれ別の解釈をするということは、カフカの読者が百万人いても百万人が別々の読みかたをしていることにも通じていよう。今は読者もまた一人一人が孤独という時代になつてきたらしい。